

## 6・弘前大学の文化財レスキュー活動報告

上條 信彦 弘前大学 人文学部 准教授  
片岡 太郎 弘前大学 人文学部 特任助教

## 1. 岩手県九戸郡野田村におけるレスキュー活動

## 1-1 資料の修復の経緯

平成23年3月11日の東日本大震災では岩手県野田村にも多大な被害をもたらした。「野田村歴史の会」会長の北田俊光氏は震災前より、野田村の古文書の研究をしており、鉄山経営に関わっていた佐藤宇助の資料を所蔵している佐藤貞夫氏より度々資料を借用し、解読していた。震災により、佐藤家土蔵も被害を受け、復興に際し、母屋とも解体することとなった。北田氏は佐藤氏との縁で、土蔵内の資料を救出し、納屋で保管することになった(写真1)。しかし、津波を被った資料は膨大なうえ、カビなどの繁殖が懸念されるようになった。弘前大学では震災後、ボランティアセンターを立ち上げ、弘前市とともに野田村での救援事業を行っていた。こうした経緯もあり、北田氏は平成23年秋に、ボランティアセンター長で弘前大学人文学部の李永俊教授に資料の件について相談された。



写真1 野田村の被災状況 (救出資料は写真右の土蔵にあったとみられる)  
(野田村観光協会提供)

弘前大学人文学部附属亀ヶ岡文化研究センターでは、平成23年度より考古資料の保存科学専門の特任助教を採用し、文化財保存の設備・技術を整備していた。センターでは今回の震災に対し微力ながらも何か復興に役立つことができないか考え、文化庁東北地方太平洋沖地震被災文化財

等救援事業(文化財レスキュー事業)への協力機関として、被災アーカイブの緊急的な保存修復処置を行うことを計画していた。

そのような時、李教授より同学部の上條信彦准教授へ資料修復の相談があった。これを受けて、平成24年1月23日に、上條と文化財の保存修復を専門とする同学部特任助教の片岡太郎が現地を訪れて資料を実見し、北田氏と救援に係わる協議を行った。その結果、紙資料の劣化が進んでいるうえ、対象が個人で対応できる量を超えている点、内容的に村政に関わる資料が含まれており、将来的に活用されるべき価値を有している点から、資料の保存修復を引き受けることにした。



写真2 屋外でのクリーニング作業

センターでは、資料の状況を見て、汚染要因は泥と海水であると判断した。また、全資料は乾燥状態にあり、油などが含まれていない点から、脱塩処理は極力避け、刷毛を使った泥落しを中心に修復作業を進めることにした(写真2)。また紙の固着など劣化の進行しているものは、水漬けにしたのち、文化財用の真空凍結乾燥機または自然乾燥を用いて処理した。作業は広めのスペースと粉塵が舞うことを考慮し、雪解け後、粉塵の舞いにくい芝生のある中庭で作業を行うこととした。泥落しは、一枚一枚丁寧に泥を掃き落す作業で、人的協力(マンパワー)を必要としたため、5月8日にボランティアセンターを通じて、ボランティ

アを募集した。その結果、学生・一般 15 名の方の協力を得た。作業は第 1 回目を 6 月 3 日に人文学部の中庭で行い、第 2 回目を 7 月 23・24 日に行った。

内容を検討した結果、個人情報に関わる資料群（私的資料）と村政・組合・村組織・会社など村の歴史が分かり得る資料群（公的資料）に分けられたため、形態別にダンボールに整理した。整理された資料は、平成 24 年 7 月 27 日に北田俊光氏に返却した。

## 1-2 佐藤家資料について

今回修復を行った資料は 2,032 点（ダンボール 10 箱分）である。資料群は私的資料と公的資料に分けられる。また時代別には、江戸末～明治初期、大正末～昭和 34 年の資料が中心である。明治中期～後期・大正前期の資料が少ない点は、明治三陸津波などで失われている可能性や佐藤家の政治への関わりが少なかった時期で資料群が形成されなかった可能性、資料自体が今回の津波被災で失われてしまった可能性がある。なお、江戸末～明治初期資料の多くは土蔵 2 階に保管されていたため、被災を免れた。これら 2 階にあった資料は、かつて岩手大学森嘉兵衛氏によって昭和 30 年代に調査されており、その際の付箋が残る。北田氏もこれらの資料の読解を行っている。ただし、一部資料が今回の作業で新たに発見された。資料は佐藤宇助宛の書状のほか、幕末の動静を記した写しなどであり、本地域の幕末・明治維新期を知るうえで貴重な資料である。

大正末～昭和 34 年の資料群が今回最も多い。これは佐藤貞太郎氏の資料が中心である。佐藤貞太郎氏は長年野田村長を務めたほか、佐藤文夫（早稲田大学法律家）、佐藤園夫（芸術家）の父でもある。また、商売を営む傍ら、毛皮獣養殖組合・馬産振興会・野田放牧組合・壮年団・大政翼賛会支部などの要職にも着いた。また戦後は佐藤殖林合名会社を設立、村長を務めた。修復資料の多くはこれら組織の経営実態を探るうえで貴重な資料である。また、組織の多くは野田村の産業の歴史を探りうる資料ともなる。

さらに佐藤貞太郎氏は、大正末～昭和前期にかけて盛んに中央政界とやり取りをした書簡が残る。宇助時代よりつながりを持つ渋沢家（敬三・栄一）のほか、井上亀六・田中逸平・猪狩又蔵・内田周平・古島一雄・福田宏一などが多い。地元では、田子一民・八角三郎・新渡戸仙岳の名がある。佐藤家には『日本及日本人』などの雑誌類も多く保管されていたため、貞太郎が戦前の政教社関係者と深い親交があったことがうかがえる。今後、佐藤文夫の生い立ち

を探るうえでも重要な資料となろう。

このように、大まかではあるが資料整理の結果、従来知られていた幕末期の資料のほか、近代期の資料群には地元政治のみにとどまらず、地方独自の産業の歴史や地方と中央との政治関係を知ることのできる資料が多く含まれていることが分かり、今後の活用が期待される。

## 2. 岩手県下閉伊郡山田町（鯨と海の科学館）におけるレスキュー活動

鯨と海の科学館は、岩手県下閉伊郡山田町に所在する博物館であり、世界最大級のマッコウクジラの骨格標本、ミンククジラの骨格標本や捕鯨機材が展示されている。東日本大震災では、館内は津波の被害を受け、これらの貴重な資料も海水に浸かってしまっていたことから、被災当初から害菌や害虫による資料の劣化が懸念されていた。弘前大学では、筑波大学大学院・松井敏也准教授からの協力要請を受けて、平成 24 年 8 月 20 日から 23 日にレスキュー活動を行った。4 日間の総参加者数は、弘前大学 2 名、筑波大学 8 名、(有)新成田総合社 1 名、三菱ガス化学株式会社 2 名である。作業は、資料の害菌や害虫による劣化を抑制することを目的とし、文化財の安定保管を行う際に用いられている RP システム（資料を無酸素無水分にする、脱酸素剤およびハイガスバリア袋による封入）による保管処置を行った。処置資料は、鯨と海の科学館所蔵のクジラ骨格標本（世界最大級のマッコウクジラの骨格標本を除く）や捕鯨機材等、館に一時保管されていた民具等（岩手県教育委員会所管）である。今回の作業で技術を要したのは、資料の形状が、ミンククジラの骨格標本のように、不定形・大型・立体物が多かったことである。こうした資料では、



写真 3 ミンククジラ骨格標本の RP パック

大型のハイガスバリア袋を資料の形状に合わせて成形し、ハンドシーラーで確実にシーリングした後（写真3）、酸素濃度の減少を酸素濃度計によって測定した。また、脱酸素剤は、空気中に約20%含まれる酸素を固定する。よって、大型のものでは、脱酸素剤による体積収縮によってハイガスバリア袋が資料に直接触れさせないため（当然、資料は養生しているが）、かつ、脱酸素剤の使用量を少なくするために、窒素ガス発生装置を使用して、ハイガスバリア袋内へ窒素を注入し、酸素の絶対量を減少させる処置を行った（写真4）。他に、作業時は、館の電力の供給が不安定であったため、かつ、電力消費を軽減するために移動式太陽光発電システム（筑波大学・（有）新成田総合社製）を導入し、館の電力と併用して機材を使用した。以上の作業により、数百点超の資料の安定保管が可能となった。



写真4 RPバックと窒素置換による封入作業

### 3. 岩手県石巻市雄勝町におけるレスキュー活動

平成25年1月16日から19日にかけて、宮城県石巻市雄勝町におけるレスキュー活動に参加した。参加団体および参加者数は、弘前大学3名、筑波大学8名、茨城県立歴史館1名、（有）新成田総合社1名、三菱ガス化学株式会社1名である。レスキュー対象資料は、雄勝町の新仮総合支所に一時保管されているもので、あらかじめ東北歴史博物館によってカビや等のクリーニングが完了した資料である。今後長期間に渡って保管するために、生物被害を抑制させる安定処置が必要であった。資料は、屏風や絵画、写真、軸物等である。作業は、クジラと海の科学館同様に、脱酸素剤とハイガスバリア袋によるRPシステムを行った。屏風や絵画は平面作品とはいえ、大型のものであったため、ハイガスバリア袋を資料の形状に合わせて成形し、

ハンドシーラーによるシーリング処理にて封入した（写真5）。以上の作業により、200点以上の資料の安定保管が可能となった。



写真5 RPバック作業

### 4. 謝辞

文化財レスキューは、各機関の連携やマンパワーだけでなく、資材や機材のバックアップも必要不可欠であった。RPシステムに係わる資材提供・機材調達は三菱ガス化学株式会社に、その他の本活動に必要な資材提供は（有）新成田総合社にご支援賜った。記して深く感謝申し上げます。